

が、湯河板拳の名義は、齋川に棚座を設らえて禊ぎを薦めるものなることを端的に示しているのだ。

ここに、我々は三度までも、阿波・紀伊圏の神話・伝承と出雲圏のそれとの断ち難い縁に遭遇するところとなった。

その第三の場合には、阿波・紀伊より出雲世界へという、信仰宣布・伝播の力が両系を結ぶ大なる要素をなしている。これに比し、第一・第二の場合にあっては、それとはいささか異なる力が働いて、出雲による阿波・紀伊の包摂という状況を生ぜしめているものと思われる。その力とは何か——。思うに、それは三谷博士のいみじくも看破せられた（「神話と成亥信仰」日本文学の民俗学的研究所収）、記紀編纂者の有する人成

古代文学における儒教精神

儒教は堯舜を祖とし文武を憲章して上は天時に律り、下は水土によって孔子が大成したものであるといわれている。先天の道をたつとび、仁を説き、礼を重んじ、修身、齊家、治国平天下を全うせんとするものである。即ち孔子の流れをくむものだとされている。孔子の名は丘、字は仲尼といい、春秋時代の魯の国の人である。孔子は周の靈王の二十年（前五五二年）十二月二十二日に魯の鄆邑に生

亥の隅Vを神聖と観ずる思想であつたらう。記紀編纂者が、その神話構成にあたり、大和朝廷より成亥の隅に位置するこの出雲世界を△御饌つ国Vの代表——穀霊の本貫の世界と観じた時に、△御饌つ国・阿波Vは文字通り雲散霧消せねばならなかったものと思われる。

本稿は、ひとまづこの辺で擱筆したい。それにしても、今後に遺された問題はあまりに多きに過ぎたようだ。本稿の終末近くに行き触れた、阿波・紀伊の親縁なる関係、何故に紀伊国は△南海道Vたり得たかの検討も含めて、それはすべて他日を期すのほかあるまい。

針 原 孝 之

まれ、敬王四十一年（前四七九年）四月十八日に七十四才で死亡している。孔子は幼くして父を失い貧しい生活をして成長したが、十五才で学問にめざめた。三十才頃には曲阜に学園を開き学匠として世に立ったのである。孔子は西南街の片隅に学園を開くと、下士または庶民階層の子弟が多ぜい集った。学園の名が高まるにつれ、中流の子弟や遠方からも学生が集ってきた。修学年間は三年としたが

速成の課程も設けられた。学生の中には学園にとどまる者もいたが多くの弟子たちは官吏となることを希望した。そして彼らは共同生活の中で切磋琢磨し、おのずから朋友とよぶ人倫社会を形成していた。孔子はこの朋友集団の中心に「師」の位置を設け、それらの弟子の個性を高め豊かにする任務を己に課し名利に心をとられなかった。

このような学園において孔子が教育の目的としたのは、

- 1 人間として立派な行動ができること。
 - 2 的確に言語表現に習熟できること。
 - 3 吏として政務のとれること。
 - 4 学識経験でうらづけできること。
- の四項目が目標であり、それぞれに応じて人間の守るべき道を正しく理解させ、実践し鍛練していった。孔子は下士または庶民のために学園を開いたことは画期的なことであり、古代においてさまざまに制約を受けながらも、孔子は「仁」を提唱し、それを端的に人を愛することだと（顔淵篇）宣言しているのは学園を開いたからこゝといえるのだと思う。

孔子の業績の一つとして重要視される論語は、孔子とその弟子の言行録で漢時代には論または伝と呼ばれていたものであり、曾子、有子などの孔子の弟子の手に成るものと伝えられている。飯島忠夫博士は「孟子以後漢初に成立したものであろう」と述べられている。この論語が日本に最初に入ってきたのは、古事記、日本書紀の時代を下らないことは記録を見ることで明らかである。

亦百済国主昭古王、以_三牡馬_二定_一、牝馬_二定_一、付阿_三知吉師_二、以_三貢上_二。此阿知吉師者阿直史等之祖。亦貢_三上横刀及大鏡_二。又科_三賜百济国_二、若有_三

賢人_二者貢上_一。故、受_三命以貢上人_二、名和邇吉師_一。即論語十卷、千字文一卷、并十一卷、付_三是人_二即貢進_一。此和邇吉師者文首等祖。（古事記、中卷、国主の歌、百済の朝貢）

十五年秋八月壬戌朔丁卯、百济王遣_三阿直伎_二、貢_三良馬_二二匹_一。即養_三於輕坂上厩_二。因以_三阿直伎_二令_三掌飼_一。故号_三其養_二馬之処_一、曰_三厩坂_二也。阿直伎亦能読_三經典_一。即太子_三孫道雅_二郎子_一師焉。於是。天皇問_三阿直伎_二曰。如勝_レ汝博士亦有耶。对曰、有_三王仁者_一。是秀也。

（日本書紀、卷十、応神天皇）

古事記では明瞭に論語十卷といっているから問題はないが、日本書紀で「能く經典読めり」といっているのも、まず儒教の書物と見てよいと思う。なお追究して言えば、これらの記事は古事記と日本書紀の一致した箇所であり、日本書紀の經典とは論語をも含めてのことと解してもよいと思われる。

十七条憲法は論語からの引用が比較的多く五経からの引用が多いのではない。（礼記は別）聖徳太子が十七条憲法において問題としたところが論語に多く五経には割と少なかった。論語からの引用が多いのは、一つの理由として論語に対する理解が深かったからだといえるだろう。なぜ聖徳太子をして論語に対する理解が五経に対してより深くしたのであろうか。論語は奴隸制社会の自由民の思想を持っていくから、当時の奴隸社会における日本人には、はるかに五経より親近感を覚えるものがあつたらう。そこで論語の文句や論語の思想が聖徳太子の十七条憲法にはより多く引用されたのであろう。論語と孝経が古代の宮廷に親近感をいだかせたのは、それは論語が人間の社会生活上での個人的な道徳を説いたものであるからだと思う。論語の仁といい、礼といい、信といい、忠というのは封建制社会にお

いては、かえって封建思想の裝飾とされるものであるが、奴隸制社会の自由人にとっては生活上の単なる裝飾ではなく、自我の拡充という実質であった。聖徳太子の十七条憲法についてはここで詳しく述べることは避けるが、今は田所義行氏の「儒家思想から見た古事記の研究」の中に

○谷川士清著の日本書紀通証(一七四八刊)

○河村秀根著の書紀集解(一七八五刊)

○飯田武郷著の日本書紀通釈(一九〇二刊)

○岡田正之氏の憲法十七条について(一九一六)

○会田範次著の聖徳太子憲法と法王帝説の研究(一九三〇刊)

○柿村重松著の上代日本漢文学史(一九四七刊)

の諸書に十七条憲法の各条に見える語句と類似の中国古典中の語句の対照をみることで明らかであり、五経の外に論語、孟子、老子、管子、墨子、韓非子、史記、漢書、文選など広範囲にわたって十七条憲法に影響を与えていると述べられている。このようなことから治者の学問として為政者の間で学ばれていたことが老えられる。

この十七条憲法の流れを継承したと見られる懐風藻について目をむけて見ると、懐風藻の序に、

百濟入朝。啓_ニ竜編於馬廐_一。高麗上表。函_ニ鳥冊於鳥文_一。王仁始導_ニ蒙於輕島_一。辰爾終敷_ニ教於訳田_一。遂使_下俗漸_ニ洙泗之風_一。人趨_中齊魯之学_上。逮_ニ乎聖徳太子_一設_レ爵分_レ官。肇制_ニ礼義_一。

とあることで、一般の人をして孔子の学風に進ませ、孔子の学におもむくようにしたことが理解できる。

また論語の一節を引用したと思われる箇所が懐風藻にみられるので、今その一例を掲げると、

- 9 欲知得性所。来尋仁、智情。气爽山川麗。風高物候芳。
- 19 玉管吐湯氣。春色啓禁園。望山智、趣広。臨水仁、懐教。
- 32 靈仙駕鶴去。星客乘查逵。諸性担流水。素心開靜仁。
- 45 惟山且惟水。能智、亦能仁。万代無埃所。一朝逢柘民。
- 46 仁、山狎鳳閣。智、水啓竜樓。花鳥堪沈翫。何人不淹留。
- 48 山幽趣、仁、遠。川淨智、懐、深。欲訪神仙迹。追從吉野溲。
- 73 鳳蓋停南岳。追尋智、与仁。嘯谷將孫語。攀藤共許親。
- 98 友非千祿友。賓是_下霞賓。縦歌臨水、智。長嘯樂山、仁。

である。このようにみると、仁に対する智、智趣に対する仁懐、仁山に対する智水、仁趣に対する智懐、水智に対する山仁、というように対応する語をもってきている。しかもこれらの語を使用している時は、ほとんど論語の「子曰、智者楽_レ水、仁者楽_レ山、智者動、仁者静、智者楽、仁者寿」を老えに入れて詠んでいる。いかに懐風藻において論語が多く引用され愛誦されていたかを察することが出来る。懐風藻の中に儒教的なことばを使用しているものを拾いあげてみると、

仁↓17例、智↓7例、仁智↓7例、徳一語のもの↓8例、帝徳、聖徳、天徳など↓10例、義↓4例、礼↓2例、忠↓1例、である。これらはことばだけの引用で思想面の影響にまでふれていないようだ。

ここで懐風藻と関連の強いと老えられている万葉集と比較してみると、懐風藻の詩人で万葉集の歌人である十九人について調べてみた。懐風藻の中に十九人の詩数四十六篇あるがその中で儒教的なものを含んでいると思われるものを示すと、

人名	懷風藻	万葉集
河島皇子	河島皇子一首の序	34
文武天皇	五言述懷一首	74
山前王	五言侍宴	423
大伴旅人	五言初春侍宴	(76)首
長屋王	五言元日宴応詔	75 268 300 301 1517
藤原総前	五言侍宴	812
藤原宇合	五言暮春曲宴南池并序 七言在常陸贈倭判官留在京一首并序 五言悲不遇	72 312 1535 1729 1730 1731
藤原万里	五言暮春於弟園池置酒并序 五言過神納言墟(二首) 五言遊吉野川	522 523 524
葛井広成	五言奉和藤太政佳野之作一首	962

である。今これらの二、三の詩を解明すると、

五言。述懷。一首。

年雖足戴冕。智不敢垂裳。朕常夙夜念。何以拙心匡。猶不師往古。何救元首望。然母三絶務。且欲臨短章。

文武天皇三首中の一首で、「自分は冠をもらって善政を行なうに十分な程成長したが才智はまだ十分ではない。過去における聖賢の道を手本として進みたいが、孔子のように努力して学問をすること

もしたくない。」と言っている。この詩には中国文学に典拠のある語句が多く用いられているが、これは直接中国文学より摂取したものである。特に三絶の務は「史記」よりの引用である。

五言。元日宴。応詔。一首。

67年光仙泛鑣。日色照上春。玄圃梅已故。紫庭桃欲新。柳絲入歌曲。蘭香染舞巾。於焉三元節。共悦望雲仁。

長屋王の三首中の一首であるが、史記に典拠のある語句を用いている。美辞を用いて儀礼的な公式の場の作品と思える。長屋王は政治家であると共に奈良朝における貴族文人のサロンにおいて、中心者のな存在であり、和歌にも才能があったといえる人物である。

五言。悲不遇。一首。

91賢者悽年暮。明君冀日新。周日戴逸老。殷夢得伊人。博举非同翼。相忘不異鱗。南冠勞楚奏。北節倦胡塵。学類東方朔。年余朱買臣。二毛雖已富。万卷徒然貧。

史記、莊子、左伝、漢書、論語、文選等に典拠ある語句を用いている。故事を並べてその苦節勞苦の故事を述べるが、同時に作者宇合の東奔西走の身をかこち嘆いたものとみられる。

五言。遊吉野川。一首。

98友非千禄友。實是浪霞寶。縱歌臨水智。長嘯樂山仁。梁前柘吟古。峽上簧声新。琴樽猶未極。明月照河浜。

楚辞、論語、に典拠ある語句を用いている。ここに遊ぶ客人は即ちかすみを食らって生きている。名利を求めないで、自分を友とする仙人の如き仲間である。吉野の詩は懷風藻中に十三首あるが、吉野を仙境と見る趣向が多い。この詩もその部類に属する。

懷風藻の詩四十五篇中、儒教的なものを含んでいるのは十三篇あ